研究ノート

最古期日朝漢字音における末尾音の弱化・脱落

遠　藤　光　暁

1.　はじめに

日本漢字音の主層である呉音・漢音は 8 世紀，朝鮮漢字音も主層はほぼ同じ頃の唐代音を反映するとされている。本稿が対象とするのは，それより前の金石文や歴史書などに散発的に見える 7 世紀以前のものであり，ここではさしあたり最古期日朝漢字音と呼ぶ。所拠資料は多岐に渡り，一つの体系をなすとは限らないのだが，日本の最古期漢字音は朝鮮半島を介してもたらされた可能性が高い。現にこれから主として取り上げる末尾音の弱化・脱落現象は朝鮮半島の資料において広範に認められ，それは本邦の資料においてもかなりの平行例が見られるのである。そうした例をめぐる諸問題を以下に素描することとしたい。

2.　『三国史記』地名における末尾音の弱化・脱落例

朝鮮半島の側で朝鮮漢字音以前の語彙・音韻の様相を反映するものとして数がまとまっているのは金富軾『三国史記』（1145 年）であり，特に地理志の地名がこれまで非常に多く取り上げられてきた。ただ，日本語史ないし朝鮮語史の資料として扱われることが多く，その場合は現代の呉音・漢音ないし朝鮮漢字音の読音を手がかりとして解読がなされるのが普通である。時に隋唐代の中国語の標準音とされる中古音の音価ないし音韻地位が引用されることはあっても，音訳字の背後にある漢字音を帰納的に求めようとする研究は少なかった。

しかしながら，新旧地名を一瞥しただけでも直ちに見て取れる音韻特徴があり，その筆頭に挙げられるのが韻母の諸要素，特に韻尾の脱落ないし弱化現象である。同じ資料の音節頭子音を扱った遠藤（2022）と同様にして，巻 34 の新羅の冒頭の「尚州」を例とすると，「沙シャ・上ジョウ・尚ショウ」が異文として得られ，中古音の韻尾について言うと「上・尚」が -ng で終わるのに対して，ゼロ韻尾の「沙」が音通している。このような場合，-ng が付加される音韻変化はほとんど見られないのに対して，音の脱落は頻繁に見られるものであり，それからして -ng が脱落して同音となっていたことが窺われる。更に全体の地名の異文例を通覧していくと，このような例が非常に多く，中古音で -i, -u, -m, -n, -ng, -p, -t, -k で終わっていた各音節の間で通用が見られ，やはりそうした韻尾の付加が生じ得た音韻的条件や意味的派生規則は見つけ難いことから，脱落していたと見るのがよい。

人名についても，例えば高句麗建国の王とされる朱蒙について異表記が多くあることが知られており，那珂通世（1895:751; 1958：101）はつとに「東明、東盟、朱蒙、鄒牟、象牟、仲牟、中牟、都慕、皆同音の轉訛ヨリ出デタル異譯ナリ。」と道破している。第一字の「東・朱・鄒・象・中・都」および第二字の「明・盟・蒙・牟・慕」は時期・資料によって異なる字によって表記されているものの，音通によってそのような異文が生じたというのである。ここにおいても，-ng とゼロ韻尾が通用しており，声母についても舌頭・舌上・歯上音および清濁の通用が見られ，母音についても通用がある。

李（1961, 1972: 16-17）は「…夫余・高句麗の官職名に「加」が見られる。その原義は、民族長・部族長であったろうと推定されているが、地理志名に見える「皆」（王）に一致するものと考えられる。

王逢県　一云　皆伯

王岐県　一云　皆次丁

この「加」または「皆」は、新羅の「干、翰」と比較できるが、音相には顕著な差異がある。モンゴル語の qan, qaγan（帝王）と比べると、高句麗語はこの単語で語末 -n の欠除を特徴としていることがわかる」としており，「皆」の

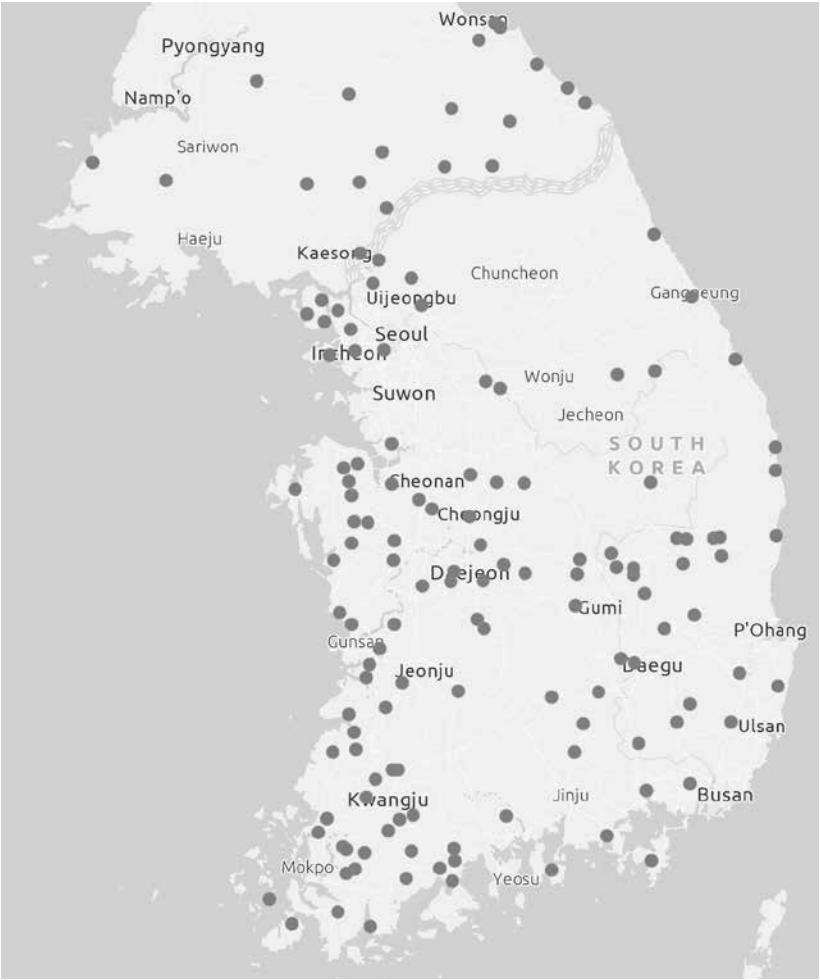
例から更に漢字音の -i の脱落も知られる。

李（1961, 1972）は『三国史記』の高句麗地名のみを扱っているため，ここで「高句麗語は」と述べるのだが，このような音通が見られる地点を示した地図 1 に見られるように，実はこのような韻尾の脱落は百済・新羅にも多く見られる。38 度線付近ではやや少ないが，それは借音ではなく意味の相当する漢字に置き換えた地名の比率が高いことによるものである。ただし，遠藤（2022）で述べたように，百済地名は白村江の戦いの後に扶余にいた官僚が一律改名したものなので，それぞれの地点ですべてこうした音韻変化を経ていた証拠とすることはできない。地図 1 を作成するための音通を網羅した原資料は論文のサイズとしては多すぎるので，別途詳しく個別的な注釈を付して出すこととして，ここでは省略する。

なお，細かく検討してみると成音節的な鼻音も存在していたことが知られる例もある。巻 37 の「七重縣一云難隱別」は早くから日本語で解けることが指摘されてきた。「難隱」が日本語の「七」の意の「ナナ」，「別」が「重」の意の「ヘ甲」に相当するというのだが，その場合，日本の学者は「ナン」・「インまたはオン」，韓国の学者は朝鮮漢字音の nan ïn という読音を念頭に入れてそのように推定したものであり，n はこのままだと 3 つ現れ，初めの n については異論がなかろうが，「ナナ」の第二音節の n に当たるのはどれか，という議論はなされてこなかった。満州語の nadan に由来するものだとすれば最後の n の説明はたやすくなるが，かえって第二の n の説明に困難が生ずることとなる。

「隱」は『三国史記』地理志ではもう一つ用例があり，それは巻 37 の「楊口郡」に対する「要隱忽次」である。「忽次」は日本語のクチ（口）であり，「要隱」は鄭（2011: 538）が日本語のヤナギ（柳）に当てており，「要」は韻尾の -u が脱落した *ia，「隱」は *n に相当し，この二字で *ian という音を表していたものと考えられる。澤瀉（1967: 764-5）が「「楊」は元来かわやなぎ・ねこやなぎ、「柳」はしだれやなぎをいうが、上代では一般に区別をしていない。枝で矢柄を製したので、ヤナギは矢の木の意と説かれるが、古く中国大陸から渡来した樹といわれ、楊（ヤ）ノ木の意で、馬や梅と同様の由来を持つとも考

地図 1 『三国史記』地理志中の韻尾脱落を反映する地点



Esri, © OpenStreetMap contributors, HERE, Garmin, FAO, NOAA, USGS

えられる。万葉の仮名書きにはヤに「楊」の字をあてた例が多いが、ウメのメに「梅」をあてるものが多いのと対比できる。」というのが参考になる。つまり，和語ではなく漢語由来の借用語だというのであるが，「楊」の字音はヤで

あり，ナはマナコのナのような連体助詞だと考えている。一方，『三国史記』の場合は，「楊」の中古音 *yang を CV 構造の日本語で受け入れる際に ya と ng の 2 モーラに分解し，「隱」は字音としては本来は主母音としてあいまい母音があったはずだが，吏読で「隱」が -n を表すような表記法が既にあり，日朝バイリンガルの人がその表記を用いて成音節的な -n を表したものであろう。現代日本語ではンは -N だが，ある時代以前は上代日本語でも音価は -n だとされ，それを『三国史記』の日本地名の背景にある日本語にも適用しようということである。それが日本語において定着する際に寄生母音として主母音と同じ -a が付加され，更に「木」が付き，連濁した形がヤナギとなる。

さて，「隱」が -n を表しているとするならば上記の「難隱」に対しても『三国史記』地名の背後にある音韻体系の全般的傾向と合致した説明を与えることができる。つまり，「難」の韻尾の -n は脱落し，「隱」は成音節的な -n を表し，全体として *nan を表す，ということである。上代日本語でも七はナナであり，半島日本語では末尾母音の a を脱落させるという現代日本語諸方言でほとんど見られない程度に弱化が進んでいたこととなる。ただし，七日の組み合わせではナヌカ・ナノカという形もあり，その場合はナンカとなる方言はかなり見られる。

3. 新羅官職名

朝鮮漢字音以前の朝鮮半島の漢字音は地名・人名のみならず，官職名からも窺い知ることができる。坂本等（1965: 618-619）には新羅の官位の『三国史記』・金石文・中国史籍・『日本書紀』における表記の対照表があり，異なる資料の間のみならず同じ文献の中でも表記に揺れがあり，貴重な異文資料となる。

例えば，『三国史記』では第一等は「伊伐飡，伊罰干，于伐飡，角干，角飡，舒発翰，舒弗邯」，金石文では「一伐干」，中国史籍では「子賁旱支，伊罰干，伊伐干」となり，ここから「伊于一」，「伐罰発弗賁」，「干翰邯旱」，「舒子」と

いった音通の例が得られる。このうち「伊于」と「舒子」は特に貴重な音通例となるが，別の論文で扱う。また声母や母音の例も扱わず，ここでは韻尾の脱落に関連するものだけを抽出すると，「伊一」のみがゼロ韻尾と -t の通用例となる。同様にして韻尾関連のみ拾うと，「伊一翳」，「沙薩」「尺咄」「級及汲 [奇貝]」，「麻末」，「吉稽」，「造沮」などが得られる。ここでは，ゼロ・-t・-k・-u などの通用例の他に，「級及汲」はすべて -p で終わるところ，「奇貝」の二字を宛てて「貝」で -p 音を表そうとしている可能性がある。

4.　日本の 7 世紀以前の漢字音に見られる類似例

朝鮮半島の資料は音通例なので，音類の間の相互関係は知られるものの，実際の音価を表しているわけではない。

それに対して，本邦に伝わった呉音以前の漢字音では韻尾の脱落を音価で直接反映した例が散発的ながらかなりある。現在でも口語に生きているものとしては「王仁わに」（-ng と -n が脱落）・「風（土記）ふ（どき）」（-ng が脱落）がすぐに挙げられる。『日本書紀』に出ている朝鮮半島の地名としては「安（羅）あ（ら）」（-n が脱落）や「伴（跛）は（へ）」（-n が脱落）などがある。

漢字音ではなく和語自体の脱落ないし弱化もあり，『日本書紀』では継体天皇の母親の振媛の出身地の坂中井にはわざわざ「中，此云那」と注記されていて，「さかなかい」ではなく「さかない」と読ませていおり，「中」が「なか」ではなく「な」となっている（坂本太郎他（1965：19））。継体天皇の出身地である滋賀県高島には安曇川があり，「あどがわ」と発音され，「安」は万葉仮名でも「あ」の最多字だが，「曇」が「ど」となるのは漢字音の -n が脱落したか和語の「づみ」の「み」が脱落した例となる。継体天皇の奥津城のある高槻市の「富田」は「とんだ」であり，「とみ」の「み」が「ん」に弱化した例となる。和歌山県橋本市の隅田八幡神社に伝えられた人物画像鏡には「男弟王」が現れ，継体天皇・オホド王を指すとする説があるが，「隅田」は「すみだ」ではなく「すだ」であり，「み」が脱落した形となる。小松は海で高句麗との往

来があり，「高麗津」に由来するとも言われているが，そこに「那谷」という地名があり，「なた」という発音で，「たに」の「に」が脱落した形となる。

九州では「鳥栖」が「とす」と発音され，「とり」の「り」が脱落した形となる。『魏志倭人伝』の「奴国」は「那珂」にあり，「なか」の「か」が脱落して「な」となった例であり，上記の「坂中井」の例と同様である。語源的にも弥生時代に最も栄えた北部九州の中心地の一つとして「中心・中央」といった意味の「中なか」に由来するものであろう。

『日本書紀』皇極元年 (642) 条では「伊梨柯須彌」という人名が現れ（坂本太郎他 1965：239），高句麗の宰相・泉蓋蘇文を指すが，「文」と「彌」が音通となり，万葉仮名の読み方からして mi^{甲}であることが知られる。ここからして韻尾 -n が脱落していることが明らかに知られるが，その一方で介音・主母音の弱化の方式は単に介音が脱落して主母音が残った，といった単純なものではなく，介音の合口成分が脱落し，i のみが残ったこととなる。

5. おわりに

小文では具体的な音価についてはできるだけ触れず，一歩退き音類の通用や脱落といったレベルに意図的に留まるようにした。その理由は，まだ母音の状態が直前に挙げた「文」mi^{甲}の例のように予断を許さないものがあり，全面的な資料収集が完了した後でないと音類・音価の系統的な推定ができないからである。

しかし，現段階でも韻尾の脱落が生じる条件は 8 世紀の日本呉音・漢音や朝鮮漢字音とは異なる全面的なものであったことが窺われる。日本呉音・漢音では中古音の -ng が鼻音ではなく -i や -u となっているが，これは長安を始めとする唐代西北方言における鼻音韻尾の弱化ないし脱落を反映したものではあるものの，それ以外の母音韻尾・鼻音韻尾・入声韻尾の脱落は見られない。朝鮮漢字音に至っては中古漢語の -m, -n, -ng，-p, -t, -k などの子音韻尾は完全に反映しており，-i, -u も部分的に保っていて，時代が遅れるほうがかえって標準

的な中古音の韻尾の様相をきちんと反映する。

すると，7 世紀以前と 8 世紀以降の漢字音受容の仕方に日朝とも断層があることとなり，どのようにして呉音・漢音・朝鮮漢字音が形成されたかという問題を考える上でも最古期日朝漢字音の研究が貢献するところが大きいこととなる。

謝辞

本論文は青山学院大学経済研究所 2020 年度短期研究および科研費 18H05510 の研究成果の一部である。

参考文献

鄭光（2011）『三国時代韓半島의言語研究』，ソウル：博文社。
Endo, Mitsuaki (2021) Geographical distribution of certain toponyms in the *Samguk Sagi, Anthropological Science*, 129 (1): 35-44, DOI https://doi.org/10.1537/ase.201229.
遠藤光暁（2022）『三国史記』地名漢字の通用例に反映した清濁合流の地理分布，『経済研究』14。
李基文（1961, 1972）高句麗の言語とその特徴，『韓』1:10, 3-35.
那珂通世（1894-96, 1958）朝鮮古史考，『史学雑誌』；『外交繹史』，東京：岩波書店。
澤瀉久孝代表（1967）『時代別国語辞典 上代編』，東京：三省堂。
坂本太郎他（1965）『日本書紀』下，東京：岩波書店。